



幼児の 教育

家庭・保育所・幼稚園

手づくり アンパンマン いっぱい★ イベントおしらせ デコレーション

千金美穂・尾田芳子 著

大人気シリーズ『手づくりアンパンマンが
いっぱい②ルームデコレーション』の続刊です。

色画用紙から生まれたアンパンマン
ワールドの仲間たちが、季節のイベントを
にぎやかにおしらせします。
アンパンマンたちと一緒に、
園生活を楽しく
盛り上げて
くださいね。

定価2,100円(税込)
26×21cm 96頁



- ★ 巻末の型紙をコピーして、
簡単に製作できます。
- ★ 型紙の組み合わせ次第で
いろいろなバリエーションを
作ることもできます。



【既刊】手づくりアンパンマンがいっぱい

- | | | | |
|---------------|-------|----------------|------|
| 1. グッズ・プレゼント | 島田明美 | 5. 通園グッズ | 島田明美 |
| 2. ルームデコレーション | 千金美穂 | 6. つくってね あそんでね | 島田明美 |
| 3. めいぐるみ・おもちゃ | コッペ平沢 | 7. つくってね あそんでね | |
| 4. ランチとおやつ | 大森いく子 | パート2 | 島田明美 |

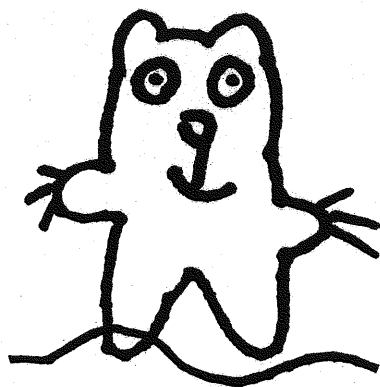
キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第105巻 第1号



幼 児 の 教 育 目 次 — 第一〇五卷 第一号 —

© 2006
 日本幼稚園協会

巻頭言「子どもの存在意義」の確認のために……………本田 和子…(4)

特集へいぬ・戌

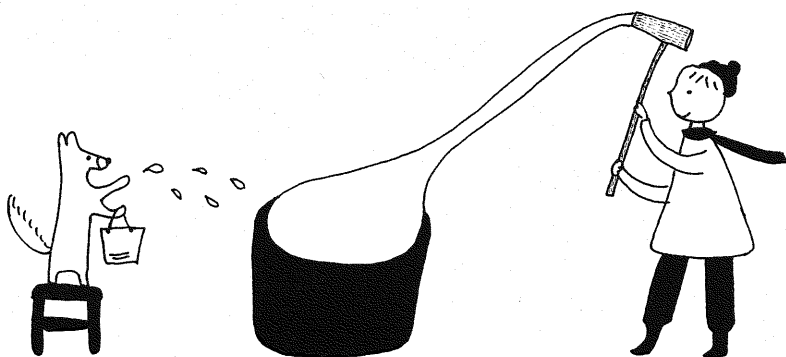
子どもとベット……………横山 彰光…(8)

日本古典文学におけるいぬ—近代俳諧の戌・犬を中心に—…東 聖子…(14)

ポチの散歩道……………飯利美知子…(20)

子どもの本に登場した犬—信じるということ—……………大澤 啓子…(26)

文化の起源としての共感性……………刑部 育子…(32)



私に通った幼稚園・保育園(8)

「いま」につながる私の“幼稚園”……………佐伯 一弥…(40)

流されずに生きる……………津守 眞…(46)

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(10)……………庄籠 道子…(54)

かめきち探検隊……………佐藤 寛子…(58)

表紙絵／さのまきこ

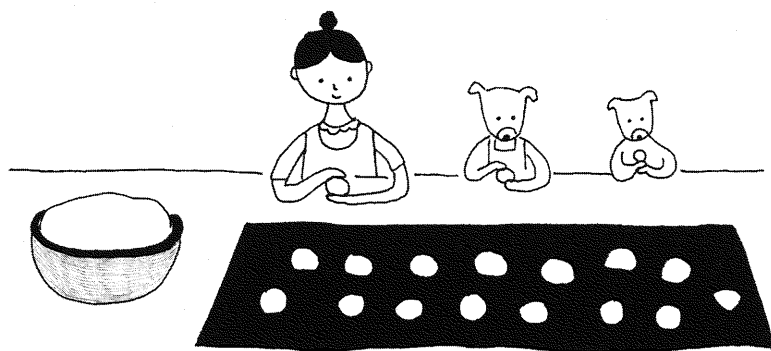
扉題字／津守 眞

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／さのまきこ

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子



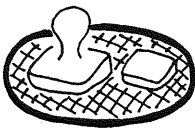
巻頭言

「子どもの存在意義」の確認のために

本田 和子

「子ども」は、人と社会にとってどんな意味をもつのだろうか。私たちはこれまで、「子ども」という存在にどのような価値を付与し、どのように位置づけていたのだろうか。

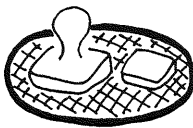
合計特殊出生率が二・〇を下回って以来、下降現象は止まるところを知らない。行政レベルの懸念な対応をよそに、一方的に進行する少子化現象は私たちの予測を超え、このままでは、私たちの未来に「子ども」のいない社会が訪れるのではと、いささかならず不安に陥れられもする。いま、私たちの社会に、そして、私たち人間の生殖活動に関して、何



が起こっているというのだろうか。仮に「子どものいない社会」が到来するとして、そのような社会を私たちはどう生きることが可能だろうか。

少子化は、しばしば巷間で話題とされるように、将来の労働力や納税人口、さらには、年金負担世代の激減など、次代の経済問題としての議論じられるべきものではない。それは、「子どもも存在」そのものにかかわる問題、たとえば、時代の「子ども観」や「子ども」と「大人」の関係にかかわる問題であり、また、子どもたちの人間観・世界観や子ども相互の結び付きにかかわる問題でもある。私たちの時代は、そして次代は、「子どもという存在」に対して、従来と同じ関係の結び手として向き合うことが出来るのだろうか。もし、関係の更改が必要ならば、それはどのような方向性において試みられねばならないのだろうか。

少子化の原因が、様々に語られている。たとえば、育児と教育に要する費用の膨張という経済的な問題、たとえば、女性の仕事と育児の両立の困難さ、あるいは、子ども問題の頻出する現在、育児に自信がもてない、等々……、なかには、子どもたちの生きていく未来社会の暗さをあげる人たちもいる。これらはいずれも、一面の真理に相違ない。調査結果は教育費の高騰を示しているし、待機児童は依然減りそうもなく、育児に自信喪失の若い母親の嘆きも相変わらずである。そして、財政・外交・生活あるいは環境問題等、地球

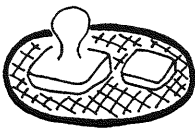


の未来もなかなか明るくはならないのである。

しかし、それらにもまして、僅かずつではあるが「子ども忌避」の心性が増大しつつある気配に注目させられる。あるいは、自分たちの人生設計に「子どもは入っていない」と感じている若い人たちの出現というべきだろうか。自分一人、あるいは自分たちカップルが、ともかくにも、平穏で豊かに格別の困難もなく、一生を過ごせればよいという考え方の所有者が増えつつあるらしいのだ。

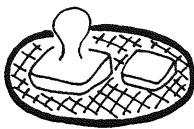
私はかねてから、極端な少子化と忌避の心性は、互いに相関し合うのではないかと指摘してきた。子どもと触れる機会の乏しさが、結果として子ども忌避を生む？ あるいは、子どもを忌避する心性が、少子化をエスカレートさせる？ いずれにしても、少子化は、「子ども」を、人の一生にとって不可避の存在とみなす心性からは遠い。そして、子どもを、自分たちで操作可能な私有物とみなす限り、この心性を完全に払底することは難しい。

子どもは、「見知らぬ世界からの贈り物である」とみなす心性は、人々のなかに蘇る力をもたないのだろうか。かつて「子ども」とは、神仏からの授かり物であり、コウノトリの運んでくる物でもあった。つまり、子どもをもつとは、人の想いを超えた出来事だということであつた。



科学および科学技術の力は、生命の出現のありようも、人の生成に関しても、かなりの程度に詳細な科学的解明を試みてみせる。そして、死を超越しようとする医療技術は、人の生命をも人為的に操作可能なものとなる日が訪れていると告げてもいい。もしかしたら、最低必要な次世代継承者くらい、人工的に産出し、人工的に育成することが可能となるのではないかとすれば、個々人が、子どもを産み育てる営みと、それに託された人類の継承という意味は喪失しよう。一部の若い人たちの「個々人の人生に子どもは必要がない」という眩きは、時代を先取りしているのもあろうか。

育児手当などによる産むことの奨励も、保育所の増設等育児に関する利便性の提供も、いずれも無駄ではなく、間違いなく現実的で有効な対策ではあろう。しかし、根底から問い直すことが必要なのは、「子どもが存在すること」の意味であり、また、「子ども存在の脱近代」、それは「脱科学化」でもあるのだが、それらによるまなごしの更新にほかならない。すなわち、子どもの誕生や育児に伴う神秘、すなわち、子どもとの遭遇によって出現する人を超えた出来事的神秘性と超越性に気付き得る感受性と、これらを基調とした子ども——大人関係の回復であろう。子ども忌避の心性からの脱却とは、「子ども」にまつわる人為万能の現状を問い直し、彼らが存在することの意味を確認し直すことから始まるのではないだろうか。



特集へいぬ・戌

子どもとペット

横山 章光

はじめに

私は精神科医で、この十年以上、「アニマル・セラピー」を初めとする、人間と動物の関係について様々な分野に関ってきました。その中で今回は特

に子どもと犬に関連することを思いつくままに述べてみたいと思います。

ペットが教えてくれるもの

ペットを飼うことで子どもたちが教わることはた

くさんあると考えられています。例えば感覚刺激、リラックス、守られている感じ、守っている感じ、感情を出せる、責任感をもつ、自尊心が上がる、元氣や笑いが出るなどです。それらは個々データとして出されつつありますし、我々の感覚としてもわかる場所です。それらの力は対人間の間ではなかなか得られない場合も多いものです。例えば人間同士なら様々な価値観や駆け引きなどが出る場所を、対ペットではそれらにこだわらないために普段なら出せないような感情表現ができることもあります。特に我々人間同士のつながりでは「言葉でのやりとり（バーバル・コミュニケーション）」が中心になり、感情より先に言葉で全てを済ませようとしてしまいがちです。しかし動物とのつながりにおいては「言葉以外のやりとり（ノンバーバル・コミュニケーション）」が必要ですので、ペットを飼うことによって表情や動きに敏感になりますし、また「相

手の立場になる」ことが重要になります。それらが鍛えられることは、その後の人間関係の中で重要になっていきます。

しかし大切なのは、親の監督があつてこそ、それらが伸びるということです。よく「情操教育にいいから」とペットを買い与える親がいますが、特に初めてのペット飼育の場合、子どもだけでは難しいことも多く、場合によってはこのあと紹介するベットロスや動物虐待などにもなりかねません。ペットを飼うということは家族全員で関与することが必要でしょう。

また、特に「犬」は、飼い主という「ボス」が必要でしつこきをきちんとしなくてはならない動物です。ある種「関係性の塊」のような動物です。その犬との関係性をきちんと保つには、飼い主が社会との関係性をきちんと認知していることが第一条件となり、つまり幼い子どもが単独で犬を飼うのは不可

能です。ある程度年長の子どもでも、散歩させたりする、という犬の性格上、社会との接点があるわけですから、例えばその犬が他の人を噛んだりしてはまずいのです。よって、親が犬を飼う、ということをよく知っておいてきちんと手助けしてやる必要となります。飼っていたらどうにかなるさ、という考えはお捨て下さい。

ペットロス

英語でのペット・ロスは「ペットの喪失」それ自体を指しますが、日本ではペットを飼った後の喪失反応を「ペットロス」と呼んでいるようです。それは最愛のものを亡くしたときに私たちの中に起る、当然の反応です。特に家族同然で暮らしているペットを亡くしたときの喪失感は強いと思われますし、また子どもにとっては「身近なものの初めての死」という場合が多いようです。ここで作られた死



▲子どもは犬（わんわん）を非常に早く認知する

への対処イメージはその後の喪失反応と関係してくる場合があるでしょう。例えば死をたいしたことと考えなくなったり、いつまでも悲しみ続けてしまうようになるかもしれません。ですからペットの死は非常に大事な時間なのです。

やはりきちんと悲しみ、それを家族たちと話し合いい、楽しかったときの事を思い出し、少しずつ消化していくのを周りが見守る必要があります。

特にまず、年齢によって死に対する感覚が違う、ということを知っておく必要があります。幼いときは死んでも再び生き返ると思っていたりして、死に対する感覚がまだ曖昧です。成長するにしたがつて、死に対するイメージができてくるとともに自分の死に対する恐怖が起こったり、ペットの死への罪責感が生まれてきたりします。年齢に応じてわかるようにお話しする必要があります。

また、ペットの死の際にはできるだけその処理の

輪の中に子ども入れることが勧められています。隠したり見せないようにしたり嘘をついたりすることは、子どもたちを孤立させたり別れのイメージを悪化させたりするかもしれません。全てを説明する必要はない場合もあるでしょうが、できるだけ家族全体でその死を悼むことが大切だと思われます。

動物介在教育

最近「動物介在教育」という言葉がクローズアップされてきています。これは教育の現場に動物を取り入れ、様々なことを子どもたちに学んでもらおうという取り組みです。動物から学べることは生や死、食事や排便、世話、出産、臭いなど様々なことがあります。それらがやはり「相手の立場になる」ことを促進し、「自分たちを知る」ことにつながり、それがひいては自尊心を高めてくれることになります。

また、犬との付き合い方を教えるプログラムもあ

り、それは噛み付き事故防止にも役立っています。可愛いからすぐに撫でに行き噛まれるケースも多く、犬との付き合いはそれなりの専門家に教えてもらう必要があるのです。

それとは別に、教育現場でなんとなく犬を徘徊させるという取り組みもされています。クラスに犬がぶらついているとみんな気が散ってしょうがないと思われるかもしれませんが、ある研究データでは、むしろ集中力が上がった、とも報告されています。

さらに米国で最近広がっている READ (Reading Education Assistance Dogs) というプログラムでは、図書館や学校などで犬に対して本を読んでもらうことで、音読が不得意な子どもを支援したりします。

動物虐待

虐待とは結局、「相手の立場になる」ことができ



▲それが作り物であっても子どもは犬の頭を撫でる

ない、つまり共感性の欠如を意味します。幼児のうちには、好奇心と探索心から結果的に動物にストレスを与えてしまうこともあります。それは動物虐待ではありません。単発的な動物いじめが見られたとしても、普通子どもはその結果が楽しくないのを知り、やめるものです。ところが年齢が上になっても故意に動物を傷つけ続ける子どももいます。ユタ州立大学のアシオン博士の研究によると、動物虐待と小児虐待と家庭内暴力はリンクしていると考えられています。つまり動物虐待が強く見られたときは、それらの関与を疑わなくてはならないということです。『子どもと動物』という本の中で彼が書いているのは、「就学前の年齢を過ぎてもこの行動が続く場合、動物への身体的な危害や怪我が伴う場合、もしくは不適切な行動について子供たちに教育する親の努力にもかかわらず固執する場合、専門家に相談することが懸命な段階なのかもしれない」。

さいごに

ペット・アレルギーには注意が必要ですが、最近アメリカの研究グループが面白い結果を出して論議を呼びました。それは「生後一年間で二匹以上の犬・猫を飼うと、子どもがアレルギー疾患に罹患するリスクを低下させる可能性を示唆」しているというものです。これはまだ研究段階なので確かなこととは言えません。ただ、家庭でのペットというのは、もしかしたら精神的なものだけではなく、身体的にもなんらかの影響を子どもたちにも与えているのかもしれないね。

(帝京科学大学)

日本古典文学におけるいぬ

— 近世俳諧の戌・犬を中心に —

東 聖子

序

近世初期頃の辞書である『易林本節用集』には、十二支の条に「戌」^{ジュツ}、気形の条に「犬」^{イヌ}、狗、^同彪^同とある。現代の『角川古語大辞典』のいぬの「戌」項には、「十二支の一。時間では午後八時を中心として、その前後各一時間の間。……方角では西北西」とある。

関連語としては、「いぬ亥子丑寅」という呪文があつて犬に追われたり囲まれたりした時、これを唱

えると退散させることができるという。また、「戌の時」の用例には『土佐日記』の発端で「十二月の二十日あまり一日の日の、戌の時に門出す」とあつて、貫之はこの紀行文を午後八時前後に出立させている。

ところで、十二支獣としては「犬」が当てられている。江戸時代の草双紙に『陰陽十二支記噺』（明和八年正月刊）という楽しい初春の絵入りの読み物がある。ストーリーは、寅の娘初日の前（子）と卯之介は恋仲。巳之介が横恋慕する。初日の前の下僕

きゃん介（戌）が姫の手紙を卯之介に届ける途中、

申介が奪う。その手紙を髪結のひつちが食べる。辰

は巳之介の父、酉は卯之介の下男。結局、中立の亥

や丑が、大黒天と弁財天に願ひ出て、二神の仲介で

仲直り。十二支で噺を作つてめでたしで終わる。絵

師は鳥居清満。十二支の各動物がふさわしい役柄で

登場する。図Ⅰは、姫君の手紙を、下僕のきゃん介

（戌）が届けるところだが、犬猿の仲と言われる申

は手紙をねらつて縁の下にいる。ここできゃん介の

袖の紋は戌であり、着物の模様は縄である。ここで

も戌は犬である（『大東急記念文庫善本叢刊・赤本黒本

青本集』汲古書院刊）。

また、妊婦が五か月目の戌の日に、腹帯をする慣

習があるのは、俗に犬は多産で安産と信じられてい

るからである。ここにも、十二支の「戌」が犬に当

てられていることが確認される。

これから日本文学、特に近世の俳諧におけるへい

ぬー戌・犬について眺めていきたい。

日本の古典文学といぬ

日本における犬は、縄文時代の遺跡から骨が発見され、弥生時代の銅鐸にも図があるという。上代では儀礼や軍事力の役割もあり、中古には貴族社会においての鷹狩り用の犬として、またペットでもあり、野犬の横行もあつたという。犬には穢（けがれ）の面とともに、異常を見破る力も有していた。中世武士の世では、狩猟に用いられ、北条高時が闘犬を愛したこ



▲図Ⅰ『十二支記噺』

とは有名である。だが、犬追物などの虐待対象ともなった。日本における上代から中世までの犬と日本人の歴史は陽と陰、聖生と野生などの、プラス・マイナスの両面があったようだ。

日本の古典文学に登場する犬のうち、『日本書紀』『古事記』に白き犬などがあり、『万葉集』の和歌にも出る。中古の『源氏物語』の「若紫」の巻、源氏十八歳の病の折、北山の風光の中で、可憐な美少女を見る場面だ。

尼君の見上げたるに、……「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠ふせごの中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。

この犬君は雀を逃がした召使いの童女の名。そのほか、「浮舟」の巻に、夜更けて「犬の声絶えず」とあり、夜半の犬の遠吠えがでてくる。『枕草子』には、「上に候ふ御猫は」の段に、一条天皇のもとに伺候しこうしている五位として愛玩されていた御猫と対比されて、「翁まろ」という犬は打たれて追放され、

後にもどり、哀れを誘う話が出てくる。

そして、中世文学では、説話文学に犬が多出すると、三木紀人氏はいわれる（『國文學―古典文学動物誌』の「犬」の項、學燈社）。また『徒然草』一二一段には「養ひ飼ふものには、馬・牛。……犬は、守り防ぐつとめ人にもまさりたれば、必ずあるべし」とあり番犬としての犬の役割を語っている。

次の泰平の時代、近世には、十七世紀末の徳川綱吉の生類憐みの令があり、また、後期読本では曲亭馬琴著『南総里見八犬伝』の大ロマンのなかに、「八房」が異類婚姻譚の著名な犬として登場する。

近世俳諧におけるいぬ

近世は俳諧にも、新年に「戌の年」を詠んだ発句はっく（近代の俳句のこと）がある。

しめ縄や春をもくくる戌の年

作者未詳

残る雪や今朝けしかくるいぬのとし

作者未詳

正月の札者とがむるいぬのとし

貞徳

春や昔だいてあるいた犬の年

保友

とりははや立て今朝こそ戌の年

良繼

霞にて山やはり子のいぬの年

利邑

これらは、縁語・掛詞などを使って、言語遊戯のな

かで、犬の特徴をつかんで詠んでいる。注連縄で新

年をくくる、残雪に喜ぶ犬、年始客に吠える犬、酉

の年の次の犬の年、春霞が山にかけ張り子の犬の

年……近世初期に作られた鷹揚でのどかなの貞門・

談林の頃の新年の「戌の年」の発句である。

「犬・狗」は、季語・季題ではない（江戸時代は

「四季の詞」等と言った）。犬は四季の詞ではなく、

「雑（無季のこと）」であるので、新年（春）以外

の他の季節でも詠まれている（尚、傍線は四季の詞

を示す）。

〈夏〉

淀舟や犬もこがるるほととぎす

其角

犬に逃いぬを追夜のすずみ哉

嵐雪

〈秋〉

朝がはや垣にしづまる犬の声

白雄

犬の声しばし里ありてむら茫

暁台

〈冬〉

一あらし犬のと吠や寒の中

巴水

犬吼る昼も淀野のしぐれかな

成美

市井や野原や川辺で、人々と朝・昼・夜とともに過

ごしている、その姿や遠吠えの聲がさまざまに描写

されている。

ここで、芭蕉・蕪村・一茶の犬の句をあげてみる。

芭蕉は『野ざらし紀行』でこう詠む。

草枕犬も時雨るかよるのこゑ

芭蕉

時雨のわびしい宿で、旅愁にひたっていると、かす

かに犬の遠吠えが聞こえる。旅の一景である。

中興期俳壇の画家でもある蕪村の犬の句は、

春うたた犬君が膝の犬張子

蕪村

であり、前述の『源氏物語』の童、犬君を出し、かわいい童が膝に犬張り子を乗せて遊ぶ、王朝世界を連想させる。円山応挙の狗三匹の絵に暁台の句とともに、賛したものである。

一茶の犬の句は多くて、次の句などがある。

草餅や芝二居て犬を友

一茶

東風吹や堤に乗たる犬の腮

一茶

信濃育ちの一茶は、さまざまな実景を切り取っていて、親しみのある犬の句が多い。

近世俳諧全般がそうであるように、俳諧における犬もまた、初期の言語遊戯的なものから、実景や現実の写実へと推移している。

浮世絵ペット展と犬張子

二〇〇五年八月に、太田記念美術館で「浮世絵にみる愛されるペット」展があり、観てきた。江戸時代の浮世絵が描くペットの第一位は猫であった。二位が犬（①愛玩用の「狎」、②野犬としての犬）、以下は猿、馬等であった。犬については、美人画などに流行の中国原産の小型で目の大きな狎が飼い犬として描かれていた。手許にあった数種の日本と海外の浮世絵図録を眺めてみると、飼い犬や市中の犬に



▲図Ⅱ 鈴木春信〈犬と遊ぶ母子〉

小さめのまるい、またはきつね型の、日本種の犬も描かれていた。図Ⅱは、鈴木春信の「犬と遊ぶ母子」でほえましい絵である。

また、犬張子が江戸時代に広く普及した。

春うたた犬君が膝の犬張子

蕪村

くちあけ
口明て春を待らん犬はりこ

一茶

このように蕪村の前述句も、一茶も犬張子を描いている。室町時代に上流社会で作った犬宮いぬみやが、出産のお守りになったことに由来する。夜の魔物を避け、子どもを守るとされ、産屋で嬰兒の枕頭に置き、顔は男子は左向き、女子は右向きという。現在でも、各地で作られている。

犬棒カルタとブルースの犬

江戸時代には、いろはカルタがある。ここにも「犬も歩けば棒に当たる」と犬が出てくる。この意

味は、禍に当たると、福に当たるとの正反対の両義がある。戌の年の初春にあたり、後者の福に当たられることをお祈りする。

また、二〇〇五年九月に映画「トウルーへの手紙」が公開された。監督はアメリカの写真家の第一人者であるブルース・ウェーバーだ。九・一一テロを経た人類へのメッセージである。ブルースは、ゴールデンレトリバー数頭と一緒にニューヨークといくつかの田舎の別荘で生活し、スタッフとともに仕事をする。犬がいるとハッピーで自然な雰囲気の写真が撮れるという。古き良き時代の犬と共存するアメリカを描いた。

霊性と穢性、凶暴と親和が共存する、しかも人間に忠実な動物の犬であるが、二十一世紀の六年目にあたり、「犬棒」カルタの福徳と、ブルースのような愛犬との穏やかな日々がこの地球上に、実現いたしますように。

(十文字学園女子大学短期大学部)

ポチの散歩道

飯利 美知子

我家の愛犬ポチは、白に茶色のブチの雑種で五歳になる。以前の勤務園に迷い込んできた時、「さびしいの……」と目で訴えられた私が自転車のカゴに乗せて連れてきて、息子達が拾ってきた二匹の猫に続き三匹目のペットになったのだ。

ポチははじめ、「クン、クン」と甘えるように声を出すことはあっても、「ワン！ ワン！」と吠えることはなかった。自転車のカゴにスッポリ入るくらい小さかったポチが、どれくらいさ迷っていたのかは判らないが、閉ざされていた心が開かれたように「ワン！ ワン！」と声を出したのは、半年以上

が過ぎてからだった。今では道に面した門から顔のぞかせ、「いつも誰かを待っているような犬」と言われて、町内の人や通学途中の小中学生に声をかけられている。

ポチが吠えるのは家の人に甘える時で、番犬にはなれないほどおとなしいが、一度だけケンカをしたことがあった。それは昨年の秋に、首輪を付けたまま捨てられたと思われる犬が町内をうろついていたので、かわいそうに思っ庭に呼びいれ餌をやるうとした時、突然ポチが吠えて跳びかかったのだ。それまでは、自分の餌を食べられても「いいよ

……どうぞ……」と見ていただけだったのに、私がやるのは気に入らなかつたらしい。予想外の出来事に呆然としてしまったが、その直後、目の上を相手の前足でガシッ！とやられて、アツケなく敗れ負傷してしまった。……そんな犬である。

私とポチはこの九か月の間、夏の暑さにも冬の寒さにもメゲず、雨の日とよほどの強風の日と出掛けた日以外は、四十分程の散歩をしている。……というか、仕事のない私の唯一の日課だったのだ。犬にも体内時計があるのだろう。二時頃になると、ポチは庭の真ん中で玄關を向いて座って待つことを始め、三時頃になると「もう行こうよ」と吠え出して催促する。出発の合図は、目と目を合わせてからの「よし！ 行こう！」との私の一声なのだが、この頃は目が合うとすぐ「OK！」とばかりに走り出し、「まだでしょ！」とダメ出しをされることが多くなった。

家を出るとすぐの所に「犬のどこやさん」があり、まずその二匹の犬に出会う。一匹はダルメシアンまじりの雑種で、もう一匹は茶色の毛がフサフサの雑種。まめに洗ってもらえるので、ホコリまみれのポチと違ってきれいだが、実はこの茶色のヤツがなかなかのワルと思われる。というのは、以前から時々「ポチの餌の器がなくなり、捜しまわると田んぼの真ん中とかずつと離れたよその家の車庫にあった」とかの珍事が起きていたのだが、犯人（犬）を目撃した人の話によると、どうもコイツらしいのだ。その家では散歩に出ることがなくしょっちゅう放されていて、うちの庭に入ってポチの器をもって行つてはアチコチに置き、知らん顔をしているようだ。黙ってもって行かれるポチもポチだが、「あんたね、きれいにしてもらって見た目はいいけど心の中にイジワル虫でもいるの？」と言いたくなってしまう（対策として、器にヒモを付けて柱にしばり付けた）。

「とこやさん」から少し行くと、私達の姿が見えないうちから吠え出す犬が待っている。その吠え方はかなりのもので、シッポも動かさずに今にも跳びかかってきそうな勢いで騒がれてしまうのである。冬の頃、その犬の剣幕に本能を引き出されたのかポチも唸って吠え返すようになり、私は「ポチはいいの！ 黙ってなさい、いいのよ」となだめていた。何が気に入らないのか怒ったように吠え立てる犬に、「何であんなにトゲトゲしているんだろう……」と、その犬の生活にアレコレ思いをめぐらせずにはられない程なのである。

そこを過ぎると、私の好きな畑の一本道になる。季節によりキャベツ・ブロッコリー・白菜などになる畑が二百メートル四方はあるだろう中をゆっくり曲がりながらの細道は、子どもの頃のいなかの生活が思い出され、思わず「行くよっ！」と走り出してしまう。そして、そんな自分達をパトラッシュとネロに重ねて、誰もいないのいいことに「忘れない

よー」なんて歌ってみたりもする。ハタから見たら「おばさんが犬に引っぱられている」としか見えないだろうと思いつつ……。

畑の道が終わると大通りに出てしばらく歩くのだが、その途中でやはり散歩の途中の近所の犬達に会う。

もう十歳を過ぎたおばさんのモモちゃんは、若いモンを簡単に寄せつけず、ポチも最近になってやっと吠えられなくなり傍にいくことを許された。雑種とはいえお嬢様として育ってきたモモちゃんは、いつも凜としていて、いつだったか風の強い日に出会った時は、「こんな風に負けないわ！」とでもいうくらい目をつり上げて前を向き、険しい雰囲気をもたせて歩いていった。

ベルちゃんはオスのシェットランド・シープドックスだが、気さくというかナントいうかポチに親しみをもってくれて、ポチもオスなんだけど、出会うとお互いの前足を絡ませて抱き合うようにしている。

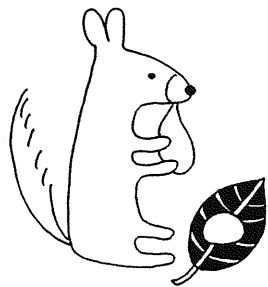
そのスマートな顔立ちからは知的な印象があるが、おもしろいことに「走れ」の言葉になぜか敏感で、私達の会話にその言葉が出ただけでダッシュしてしまつたこともあった。育ちの良さが穏やかさになつてゐるような犬なのである。

そのベルちゃんには、五年前に成犬のノラでさ迷つていたのを保護された、ロリちゃんというメスの同居犬がいる。ロリちゃんはポチ以上に心に傷を抱えていたのか、物音に怯えたり人間に強い警戒心があつて、家の人にさえ、うれしさなどの感情を表すようになつたのはついこの頃のことらしい。そして不思議な話だが、保護されてから病気になる入院させた時、十日程で治療費が二十万円を超えてしまつたため、「ごめんね、これ以上は無理だから……」と死を覚悟して家に連れ帰つたところ、みるみるうちに元気になつたのだという。今ではまったくフツーに暮しているのだ。ロリちゃんは、いつも誰に対しても無表情でひっそりした感じなのだが、ポチ

にはじつとまなざしを向けてくれるように見える。

他にもいろいろな犬に出会ふが、その中の小グマのような風貌の犬のこと……会うとやたらと吠えてくるその犬の飼い主は、ウンチ用の小さなシャベルで吠えるたびに頭をゴツン！ ゴツン！ と叩くのだ。加減のないその叩り方はこちらにまで音が聞こえる程で、私は思わず（そんなに叩かなくなつていいのに……叩いたからつて吠えなくなるわけじゃないでしょう）と心の中でつぶやいてしまう。やっぱり、犬だつて体罰だけじゃダメなんじゃないかな。

さて、帰り道では家のすぐ近くのヨシオくんといつてもらうことがほとんどない。それでもコーギーまじりの太ったヨシオくんはたまに放されるのだが、何故かポチの



.....

ところに来ては「ねっ！ 何してんの？」「何かしようよっ！」「ねっ！ ねっ！」という感じでじゃれつき、吠えまくり、はしゃぎ回って手がつけられなくなってしまうのだ。さすがにポチもうつとうしくなるらしく、「帰れよっ！」とでもいうように吠えて嫌がり、私も「ヨシオくん！ もう家に帰んなさい！」と怒るのだが、何を言われても聞く耳もたずで、連れ戻されるまで我家の庭を走り回りオシッコもアチコチにする始末……ワケのわからんチンの犬なのだ。ただ、散歩の帰りに寄る時もスゴイ勢いで吠えてくるが、うれしさのあまりなのだろうことは、ちぎれんばかりにブンブン振れているシッポから伝わってくる。きつと、小さい時に親・兄弟とじゃれ合う経験がなくて、関り方を知らないのかもしれない。そんなヨシオくんに、「来たよー、何してたの？」「いいの、そんなにナカナクテ。また来るからね」と、なんとか穏やかに向き合えるようにと話しかけてしまう私である。

もう一匹のどん兵衛は十歳を過ぎたハスキー犬で、この種の性質そのままのノンビリした穏やかなおじさん。「どんちゃん！」と声をかけても「あー？ 誰だー？」と振り向くだけで、めったに吠えることもない。しかしこのどん兵衛にはとても気になることがあって、自分の小屋の出入り口のすぐ前にウンチ・オシッコをしてしまうようなのだ。そして、その量がいつぱいになると踏むのは嫌なのだろう……小屋から出られない状況になってしまいうらしい。なんとも情けない光景である。もしもうちの犬だったら、「ちよつと考えてみなさい！ ここじゃない所にしたらいいでしょ！」と怒られていることだろう。犬もこれくらいのことを考えないでいるのは損なものだと、どん兵衛を見ては思うのだった。

ところで、これまで登場した犬達の他に成犬のノラに出会うこともある。その犬達は、アテのない旅の途中のように枯れた草むらの陽だまりに寝ころんでいたりと、通る人の後を追って人恋しさを表すのとい

て、拾いもののペットが三匹もいる我家ではこれ以上飼うのは難しく、その姿に切なくなってしまう。

ボチ達のように人と共に暮らし可愛がられている犬と、食べる物やねぐらを自分で探しまわりアテなくさ迷う犬がいて、それは小さな偶然により分けられた運命のようであり、如何ともし難い現実である。

そんなノラ達に、「この犬達はボチを羨ましいと思うだろうか……自分の身を悔しがって（何で可愛がられるのがお前なんだよ！）と腹を立てたりするだろうか……」なんてことも思わされてしまった。犬の思考はそこまでは及ばないのだろうけれど、それでもノラ達はその現実を生きるしかない……。

ノラ達の姿に、自分の現実にくすぶる思いをもっていた私は、「自分の現実をしつかり歩む」ことを教えてもらったと思っている。保育者として大切にしていた「一人ひとり違って当たり前」は、大人になると実生活や境遇などのさまざまなことが絡んで

きて、時にはどうしても他者との比較になったりするものだから、「何故私は……」「どうしてこんな……」と自分を見失って嘆きになることがある。そして、そこから動けなくなってしまうたりもするのだが、「自分の現実を、喜びも悲しさも苦しさも全て抱えて歩む」ことを凜として成し遂げられるようにと、ノラ達の現実の厳しさを見て思うことができた。

また、人がそうやって歩むためには、「自分を丸ごと包んでくれて導いてくれる大きな存在と、心を寄せ合う他者との関り」があるといいのだろうし、小さい頃の「愛された」というあたたかな思い出なんかも支えになるのだろう。

これは、「ボチの散歩道で見つけた尊いメッセージ」なんだと思う。

（文中の犬の言動に関する解釈は、職業病的なものであることをお断りしておきます）

（公認・こもりや幼稚園）

子どもの本に登場した犬

— 信じるということ —

大澤 啓子

父が動物好きだったせいで、私の子どもの頃の我が家には犬、猫、雉、鶏、などたくさんの動物たちがいた。中でも犬は特別で、いつも家族の話題の中心になっていた。今思えば犬のいる生活は、私たちが子どもにやさしさや思いやり、生きる力など、多く

のことを自然に教えてくれた。子どもの本の中にも様々な犬が登場するが、彼らは無邪気であったり、賢かったり、忠実だったり、どれも犬らしい犬である。時には人間以上に人間らしく生き生きと描かれ、犬と人との関係は暖かくこころを打たれる。そ

れほど犬は人の生活に入り込み、犬と人は切っても切れない関係となっている。

「うちに犬がいたらいいな」「犬飼ってもいい?」

「犬が欲しい」

子どもたちはいつもそう思うが、犬を手にいれるのも最近はなかなかむずかしい。昔は仔犬が公園や道端に捨てられていることもあったが、最近は捨て犬などめつたにいない。犬はペットショップで高いお金を払って買う時代になってしまったようだ。運がよければ、知り合いなどで生まれた仔犬をもらえることがあるが、あとは野犬収容所に登録だ。

ジョン・バーニンガム作『コートニー』（ほるぷ出版）に登場する三人の子どもたちも犬が欲しくてしかたがない姉弟だ。両親を説得して、ようやく野犬収容所から犬をもらってきた。

収容所にはたくさんの犬がいたが、子どもたちは

「だれもほしがらない犬」が欲しいという。係のおじさんが「どんな犬かだれも知らない、どこからきたのかもわからない。もらい手がひとりもない、じいさんいぬ」のコートニーを見せてくれた。

「コートニーがいい」といって、子どもたちはその「じいさんいぬ」をうちへ連れて帰った。

こんな出会いをバーニンガムはさらりと描いているが、子どもたちはおおらかでゆつたりとした風貌のコートニーを、ひと目見て大好きになってしまったようだ。コートニーのほうも、だれからも顧みられなくなつて、今は収容所で寂しく最期を待つだけの身が、再び家族に迎えられるとは思つてもみなかっただろう。何のめぐりあわせだろうか、素敵な出会いである。

翌日からのコートニーの活躍ぶりは素晴らしく、「じいさんいぬ」のイメージはどこへやら、「犬」というより何でもできるお手伝いさんのようだ。最

近は犬でも盲導犬や介助犬、警察犬、救助犬というように仕事をもつ犬がいるが、彼はさしずめお手伝い犬、お助け犬というところか。人間の仕事をこなすばかりか、危険なことにも立ち向かう、なくてはならない存在の犬だ。そんなある日、子どもたちにとってなくてはならない存在のコートニーがいなくなってしまった。

不思議な犬だ。コートニーが子どもたちの家にきた時、彼はどこからか衣装の入ったトランクをもってきたのだが、そのトランクも消えている。トランクには、CAIRO・SYDONY・OSAKA・NYなど世界各国の都市のステッカーがべたべたと貼ってあった。世界中旅をしてきて、風にふかれて、またどこかの国で子どもたちのお手伝い犬をしているのだろうか。

コートニーがいなくなっても不思議なことは



おこった。海辺で子どもたちの遊んでいたボートが沖に流されてしまったのだ。かあさんは助けを呼んだが、ボートはどんどん沖合に……。が、その時、ボートは何かにつっぱられるように岸にむかい、子どもたちは助かった。「いったいどういうことだったんでしょね」と作者は結んでいる。

ボートを岸に運んだのはコートニーだったのか。そうあって欲しいとコートニーを信じる読み手の気持ち裏切らないのは、崖の上に小さく描かれた犬の姿だ。やっぱりコートニーが助けにきてくれたん

だ、と宙に浮いていた読み手の気持ちを納得させてくれる。

子どもたちとその家族についても、どここの誰なのか名前も出てこないというのはどういふことか。どこにでもいる誰もにあてはまるということか。トラノクのステッカーにあるように、コートニーが訪れた各地の子ども誰もが、愛するもの、信じるものを守られているともいえるのだろうか。その守り役を作者はコートニーⅡ「犬」に与えた。犬は主従関係をわきまえ、どこまでも忠誠をつくし主人を守る。犬という動物はそれほど人との関係が深く、それは愛情でつながっているのである。

コートニーがどこからきて、どこへ行ったのか誰も知らない。まるで夢の中のような犬だが、いつもどこかで守ってくれる、子どもたちにとって愛すべき大きな存在なのであろう。

人とのよい関係を切られてしまった犬もいる。

犬は大昔から人間の身近にいた動物で、人間のよき「友」であった。そして今は、飼われることがあたりまえの動物として存在している。しかし、何かの事情で人間世界から孤島に遠ざけられた犬たちは、犬だけで群れをつくり野犬となって生き延びていった。

椋鳩十作『椋鳩十の野犬物語』（椋鳩十まるごと動物ものがたり3・理論社）の中の「丘の野犬」のアカも離島で生きてきた野犬だ。これらの野犬はのら犬とちがって、数百年も昔にこの島に捨てられた飼い犬が野生化したものだ。彼らは時々山から里におりてきて家畜や人を襲うので、とても怖がられていた。

お百姓の松吉が丘の畑を耕していると、一匹の野犬が岩の上に座ってずっとこちらを見ている。毎日

同じ場所に来るので、初めは気味悪く思っていた松吉だが、その犬にだんだん親しみがわいてきた。おにぎりをやっているうちに、犬は後をついてくるようになり、とうとう松吉の家の床下に住み着いてしまった。松吉はその野犬をアカと名付けて可愛がったが、アカは松吉以外の人にはなつかなかった。

ある時、部落のニワトリやウサギが頻繁にいなくなり、松吉のところのアカがあやしいといううわさが広まった。アカを野犬狩りに引き渡すため毒のエサを与えなければならなくなり松吉は悩み後悔する。こんなことになるのだったら、野犬のままそっとしておけばよかったのに……。

切ない話である。人間に捨てられて何世代も生き延びてきた犬は、人間との交流を取り戻せるのか。数百年の間失っていた関係だが、犬本来の人に寄り添う性質を思い出すのに時間はかからなかった。作

者によると、犬が人のツバのついたエサを食べるということは、その人と犬のところが近づいたことを意味するという。賢いアカは松吉のツバのついたおにぎりを、最初は用心深く遠巻きにながめていたが、しだいに近づきもつと欲しがるようになり、松吉にここを許すようになった。

作者の椋鳩十は「遠山犬トラ」という話の中で、「犬という動物は、あれでなかなかの寂しがりやなのでしょうか。あるいはまた、いつもなにかを愛していないければいられないのでしょうか。そしてまた、犬という動物は、人間をすっかり頼りきっているのでしょうか……」といている。では、野犬はどうなのだろう。アカは普通の犬とはちがいが野犬だ。そう簡単には人にここを許さない。が、野犬といっても先祖は飼われていた犬。数百年前の遠い先祖の記憶が、松吉の愛情でだんだんほぐれてき

た。松吉の投げるおにぎりを食べるうち、松吉の近くにいたいという気持ちが生まれてきたのだろう。

そして、アカが松吉をすっかり信頼したときに、アカに思わぬぬれぎぬがかかる。

人間とは何と身勝手な生き物なのだろう。野犬狩りから身を守るにはアカは松吉を頼るしかなかったのに、松吉は本心ではないとはいえアカを裏切ることになった。犬は絶対に主人を裏切らない。裏切らないのが犬なのだ。しかし、松吉の心中を思うところ痛む。孤独な者同士、こころが通じ合えたと思ったが、野犬の現実はきびしい。

それから数か月がたったころ、松吉は丘の畑の岩の上でアカと再会した。松吉はアカが生きていたことをよろこびアカの名を呼んだが、アカは尾も振らず、近づくとそのまま林の中に見えなくなってしまう。野生であるが故に飼いだにもなりきれず、

また、人の愛情にふれてしまったために山に帰ることもできず松吉のそばにいたい気持ちを抑えることができなかったアカ。松吉は泣きながら「これいいのだ、この方がいいのだ」と考える。その時、アカもまた、自分の名を呼ぶ松吉のなつかしい姿を確認し、目の前にいる松吉の昔と変わらぬ愛情を感じながらも、もう松吉のそばにはいられないことを悟り、「これでいい」と思ったのではないか。

アカは二度裏切られている。遠い昔、島に捨てられた記憶、そして今回。信じ切つてこそ人と犬の関係なのである。自分に愛情をかけてくれる人を信じ、その人の愛情に応えようとする、犬とはそういうものなのであろう。犬の性質と行動を知り尽くした、犬への思いのこもった話である。

(駒場幼稚園)

文化の起源としての共感性

刑部 育子

「共感」という言葉を英語で訳してみると、「Sympathy」あるいは「Empathy」となる。英語のこの二つの「共感」という言葉の違いを調べてみるとおもしろいことが見えてくる。「Sympathy（共感）」は自分と他者とは同化した関係の共感、「Empathy（共感）」は自分と他者との違いを認めた上での共感を示している。この違いに、最近私はとても興味をもっている。というのも、文化的学習として子どもの「模倣」の発達を分析しているうち

に、この二つの「共感」が文化の生成に大きく関わっていることが見えてきたからである。本論では筆者らが行った研究事例（一歳十か月～二歳四か月の乳児を対象）をもとに、同調現象としての「共感（Sympathy）」から、異なる他者理解に変わっていく「共感（Empathy）」の発達プロセスとはどのようなものかを紹介したい（Gyobu & Sekihara, 2005）。

模倣の第一段階 相手の動きに共鳴し、同調する子どもの動き

夕食を前に母親がダイニングテーブルの上で大根おろしをすっている。すると目の前にいた子どもがこの母親の動きと同調しながら手を動かし始める。その様子に気がついた母親は、子どもを見て微笑みながらその手を止めたり、動かしたりしてみせる。すると子どもの手も合わせるかのように、止まったり動いたりする。

このとき子どもにとっては何か一緒にやっているということを楽しんでいるように見てとれる。また、母親も自分のことをまねしている子どもが愛らしく見え、それに気がついて微笑み返す。たまたま子どもが大人の動きに同調するように動かし始めた子どもの行為に対し母親は自分のまねをしていると

捉え、うれしそうに微笑み返すのである。同調行為・共鳴 (Sympathy) の中に人としての文化を味わう相互行為が始まっている。

模倣の第二段階 モノを他者とともに使うことを通して文化的意味に参加する

子どもがモノに意味を感じ始める過程というのはどのようなことからなるのだろうか。次の事例は、文化を背負った大人と子どもの間に意味がつけられていく過程を示している。

祖母がテレビの画面のほこりを雑巾で拭いていると、そばにいた S (一歳十一か月) は洗面所からお手拭タオルをもってくる。そして祖母の横でよいしょよいしょと手を大きく動かしながら拭いている。祖母は「S がまねしている」と周りにい

た母親や叔母に向かって言う。

ここで注意しておきたいことは、この時点でSは「お掃除をしている」という大人（他者）の目的を理解しているわけではないということである。自分の大好きな家族たちのやっていることを自分も一緒にやってみたい、参加したいという感じに見受けられる。だから「格好」だけが似ている。実際、Sはテレビを拭く雑巾の代わりに手を拭くためのハンドタオルをもつてきて拭いてしまっている。つまり、ハンドタオルの使用の目的とテレビを拭く雑巾との違いがわからず、ただ似たものをもつてきているだけなのである。しかし、このことを祖母は「それで拭いちゃだめよ」とは言わず、子どもがまねして一生懸命拭いていることをほほえましく見ている。祖母はそれを周りの家族たちにも報告をしている。

発達心理学者ヴィゴツキーはチンパンジーと人間

の思考の違いがどこからくるのかを
探求する中で、人間だけがもつ特有

な能力、高次精神機能について注目した。高次精神機能には、「模倣」や「媒介物（道具）」の創造的使用も含まれている。上記の例では、道具の使い方という点でSが他者の目的まで理解してタオルを使用しているわけではないことは明らかである。しかしこの子どもの同調的かわり（格好だけのまね）に、大人は敏感に文化を感じ取りSが「掃除をまねしているつもりなのだ」という意味づけを行う。このように、「文化」の始まりがまさに子どもの行為に対する大人の意味づけにあるのではないかと私は考えている。

最近、心理学者マイケル・トマセロらは、他者の意図理解と共有が文化の起源であるとする興味深い



論文を発表している (Tomasello et al., in press)。

一方、京都大学霊長類研究所の松沢哲郎氏らによるチンパンジーの親子に見る一連の研究では、チンパンジーの大人と子どもの間にも人間と同様のコミュニケーションがあることを明らかにしている。チンパンジーの親子の間には、コミュニケーションの出发点としてのアイコンタクトもあるし、高い高いをして遊ぶ様子なども見られる。またチンパンジーは人間と同じように道具も使う。このように、大人と子ども、子どもと対象物というそれぞれの二項関係においては、チンパンジーも人間もさほどかわりはない。しかしながら、チンパンジーと人間との間には、子どもと対象物、それにかかわる「大人の行為」という三項関係において、決定的な違いがあると筆者は考えている。

人間の文化的学習との違いについて、トマセロら（一九九三）はイモ洗いをしたこととで有名なニホン

ザルの例から次のように述べた。複数のニホンザルがイモ洗いを始めたことは、文化的学習が行われたかのように見えるかもしれない。しかし、もし価値ある文化だとしたらその善さが広まるはずである。

ところがこのイモ洗い行為はその群れの一部のサルに限られ、群れ以外に広がることもなかった。また、新たな形の創造を含みながら世代を超えて累積していくことが人間の文化であり歴史であるとする、そのようなことに至ることもなかった。このことを筆者なりに言い換えると、このイモ洗いの例は、同調のレベルにおける形だけの同じ行為の発生にすぎない。文化の伝播はなぜそれをするかといのかという文化の善さ（他者の意図）を理解することなしに成り立たない。それが人間にしかできない他者の異なる意図を理解し、共有する「模倣」であり、「Empathyとしての共感」なのである。

さて、大人の子どもの行為に対するかわり方だ

が、チンパンジーの大人もいたずらする子どもの様子を見守ったりするという点では人間と同様である。しかしながら「模倣」に対する人間の大人のかかり方の違いは、一緒にいる大人が子どもの行為に意味を見出すかどうかということにある。このことを人間の大人は自発的に行う。そして子どもは日々の生活の中で大人が示す文化的文脈に巻き込まれていくのである。人間のシンボル・表象・文化への参加の仕方は、チンパンジーとは大きく異なる。模倣をめぐる大人の子どものかかわりの中に人間の高次精神機能を育てる重要な資源があることがみてとれる。

模倣の第三段階 逆役割模倣

今まで大人のまねを同調的に模倣していた子どもは、さらに「相手になってみる」ということをさか

んに行うようになる。Sが二歳になったばかりのころ、弟が生まれ、家族が弟の世話で忙しくなった。Sはその様子を見て、弟の世話にも興味を示し始める。あるとき、Sは弟を抱こうとする。そのとき、父親はまるでS一人が弟を抱いているかのように手を添えてやり、Sの「なりたい自分」に一役買う。父親はSの手の延長となつてSのやりたいことを達成させるのである。こうした文化の一部を大人が援助する行為は、子どもの意図を察した人間ならではの共感(Empathy)的行為である。

四か月後にはSは一人でお気に入りのうさぎの人形を抱いて遊んでいる。家族が弟にしていたように、うさぎを弟の代わりに見立て、哺乳瓶で牛乳をのませるまねをしたり、ゲップをさせたりしている。Sは哺乳瓶をもって「一一〇(ミリリットル飲んで)」と言っている。

第二段階までの模倣は他者と同じ動きを楽しむ中で行われていた。しかし、第三段階では相手が行ったことをするという他者の行為を演じた模倣となっている。そうすることによって、Sは他者の視点に立つて世界を見ることを何度もごっこ遊びの中で経験するのである。そして今度は共鳴し、同化する共感 (Sympathy) ではなく、異なる他者への共感 (Empathy) が始まることになるのである。

模倣の第四段階 人工物の使用には他者の意図が含まれている

人間が加工し創造したものを「人工物 (artifact)」という。ここでは「人工物」を手の延長としての「道具 (tool)」と区別する。チンパンジーは棒を使って穴の中にある蜂蜜をとることがで

きる。しかしこの棒は何かの目的のために加工された道具ではなく、蜂蜜にとどかない手の延長 (道具) としてチンパンジーが棒を使ったにすぎない。一方、人工物は人間がある目的のために作り出したものである。われわれはモノからその意図を理解し、ある目的のために使用している。鉛筆は何かを書くために加工されたものであるし、ノートは何か必要なことが書かれるためにつくられたものである。このように、「人工物」には人間の意図が刻み込まれている。すなわち、「人工物」理解の背後には、製作者への意図の共有、すなわち異なる他者に対する共感 (Empathy) がある (Tomassello, et al., in press)。子どもはこうした「人工物」をどのように理解していくのだろうか。以下はその事例である。

Sの持ち物にはデイズニーキャラクターのプー

さんがしばしばついていた。あるとき、夕食の最中、後から仕上がったラザニアを取り出そうと、叔母がプーさんの絵のついたミトンを使おうとした。Sはそれを見つけて「自分のものだ」という顔をして叔母のところに寄ってきた。叔母は熱くて危ないから「来ちゃいけないよ」と言った。しかし、叔母はラザニアを取り出した後、Sの手にそのミトンをはめてあげた。そしてSはオーブンからラザニアを取り出すまねを何度もして見せた。

三か月後、たまたま同じような状況で、叔母はめんどろなのでミトンを使わずに、オーブンから熱いものを取り出そうとした。すると、今度はSがミトンを指差し、使わないの？ という顔をしている。叔母は「そうだね、ありがとう」と言っていてミトンを手にはめ、ラザニアを取り出した。

ここでおきてい

ることは、当初、

Sはミトンという

「熱いものを取り

出すための道具」、すなわち、ミトンがある目的のために使われる人工物であるということを理解していなかったということである。Sの理解はプーさんの絵の描いてあるものなら自分のものであるということに限定されていた。それは人工物の理解というよりは自分の延長としてのモノだったにすぎない。

しかし、大人とのやりとりの中で、それがプーさんの絵がついていても、ある目的のために使うのだという異なる意図を大人とともに共有することができた。大人はSの意図を理解する一方で、Sの意図とは異なる目的でミトンが使用されることをSに示した。Sはそのことを大人とともに理解し、その模倣を大人の前で披露し、楽しんだ。



さらに、この出来事のあと、叔母が「熱いものを取り出す」という同じ状況でミトンを使わなかったとき、Sはそれを指摘した。ある目的の文脈でミトン（人工物）が使用されることを理解し、認識したSは、そこから外れた行為を見逃すことはなかった。このことはまさに人工物の背景には他者の意図があるということを示していることを示している。ここにも他者とのやりとりや文化的学習の根源に異なる意図をもつ他者を理解する「共感（Empathy）」があることを示しているといえる。模倣、すなわち文化的学習のプロセスには異なるレベルの二つの「共感」の移行を垣間見ることができる。その移行がまさに「創造物」の生まれる過程である。そして共有された理解の達成を支えるのは異なる他者、大人の存在であるとはいえないだろうか。人間だけが「Sympathyとしての共感」を超えたもう一つの「Empathyとしての共感」に至ること

ができた。

（お茶の水女子大学）

文献

- Gyobu, I & Sekihara, S. (2005) The developmental processes of infant imitation as cultural learning analyzed from a relational view point. International Society for Cultural and Activity Research (ISCAR2005), Seville, Spain.
- Tomasello, M., Kruger, A. & Ratner, H. (1993) Cultural learning. *Behavioral and Brain Sciences* 16: 495-552.
- Tomasello, M., Carpenter, M., Call, J. Behne, T. & Moll, H. (in press) Understanding and sharing intentions: The origins of cultural cognition. *Behavioral and Brain Sciences*.

私を通った幼稚園・保育園(8)

「いま」につながる私の“幼稚園”

佐伯 一弥

「私を通った幼稚園・保育園」というシリーズ名にもかかわらず、まずはじめにふれておかなければならぬことがあります。それは、私の場合、制度上の厳密な規定において、幼稚園にも保育園にも通っていないかった、ということですから。しかし、それに“類する”施設には通っており、実は、そこでの様々なかかわりが今の仕事につながっています。そこで、今回は半ば番外編的に、この施設のことについて紹介してみたいと思います。

私の生まれ育った“街”と通っていた“幼稚園”

私が生まれ育ったのは東京の郊外でした。もともとは武蔵野の雑木林が広がる中、古い街道沿いに家と畑が転々と並んでいるようなところだったそうです。しかし、昭和三〇年代に入

り、私の父が勤務していたメーカーが大規模な工場とそれに伴う社宅など関連施設の開発に着手しました。

私は生まれてから二〇代半ばまで、この社宅で暮らしていたのですが、いま振り返るととてもユニークな環境に身を置いていたのだと感じます。先ほど述べたように、私が生まれ育った社宅は、それまで雑木林と畑しかなかったこの地域に、工場の開設と共に開発されたいわば大規模な団地だったからです。一棟あたり三〇から五〇世帯入居できる建物が、全部で二〇棟以上あり、そこで居住する人たちの生活を支えるために、敷地内にはスーパーマーケットや様々な商店の他、飲食店、プールや野球場、グラウンド、テニスコート、体育館などのスポーツ施設、児童遊園（その当時は二箇所ありました）、そして病院（診療所）までありました。さらに、同敷地内を割譲する形で、公立の小学校が設置されました。つまり、工場に隣接するこの社宅群が一つの「街」として構成されていたのです。

そして、この「街」の中に私たちが「幼稚園」と称していた二年保育の企業内保育施設がありました。もともと、私自身は第二次ベビーブームの世代に該当し、企業内保育施設とはいえ、私が通っていたときには年少が五クラス・年長が四クラスの計九クラスがありました。そして、そのほとんどの子は、隣接する公立小学校へ入学しました。当時は全体で一〇〇〇人規模の小学校だったのですが、そのうちの約半数がこの「幼稚園」からの出身者でした。つまり、制度的には無認可の保育施設に該当するのですが、実質的にはこのような性格の「幼稚園」に通っていたのです。

“園生活”を振り返る

改めて当時の園生活のことを振り返ると、断片的ではあれ、様々な場面が思い起こされます。行事としては、運動会や生活発表会、お泊まり保育などの光景がいくつか思い出されますし、また、普段の生活の場面についても、園舎内はもとより園庭の光景と合わせて、いくつか思い出されます。どちらかというと活発に体を動かす遊びよりも、自分のイメージ世界——特に鉄道など乗り物のイメージ——に浸りながら、ひとりで遊ぶことが好きだった私にとって、園庭の片隅に置かれていた廃車となったマイクロバスによく乗り込んだことや、園舎内のすべての廊下に貼られたビニールテープの線路の上を、底を空けてもらった段ボール箱に入り、両脇で抱えつつ「ガタンゴトン……ガタンゴトン……次は○○駅……」とつぶやきながら電車になりきっていたことは本当に楽しい記憶です。そのことは、同時に、園児数が多かった当時の状況の中でも、子どもたちの思いから繰り広げられる遊びを大切にしたい園生活を送らせてもらっていたのだろうと考えられます。

私の住んでいた“街”のすぐ近くには、様々な教材を用いた“知的教育”と称する学習活動を積極的に展開し、それを謳っていた（こちらは制度上も“本物”の）「幼稚園」がありました。社宅からも通っている子どももいて、いろいろな教材などを見せてもらったことがあるのですが、そのときには「ずいぶん自分の通う“幼稚園”と違うところがあるんだな……」と幼心にも感じたものでした。併せて、素朴に「なんだか難しそうで、大変そうだな……」と思っ

たのも正直なところですよ。くわえて、小学校には両方の幼稚園を卒園した子どもたちが集まってくるわけですが、そこに成績上の大きな差が生じることはなく、これもあくまで個人的な実感ではありますが、「自分の通った『幼稚園』は遊んでばかりいたけれど、別にあれでよかったんだ……」と、小学生なりに捉えていました。

だから、というわけではないですが、卒園後もこの『幼稚園』にはよく遊びに行っていました。当時、この『街』に住んでいた約五〇〇名の小学生からなる子ども会の活動の場になっていたので。そこでは様々なサークル活動が企画され、学校から帰るとすぐに『幼稚園』へ遊びに行きました。その際、自分のお世話になった先生方と会えるのも、また大きな楽しみでした。

もともと中学校に進学してからは、校内のクラブ活動などで忙しくなり、『幼稚園』の脇を歩いて通学していたものの、その中に足を運ぶことはすっかりなくなっていました。

再び、『幼稚園』に行く

その後、私は大学に進学しました。そして、二年次に開設されていた『発達心理学』を受講したのですが、ここである宿題が出されました。それは「夏休み期間を利用し、何でもいいから年齢差について検討する研究（実験）をしてきなさい」というものでした。その時点で実験法をはじめとする研究法のトレーニングも受けていな



かった私たちには戸惑うばかりの課題でしたが、逆に、「生身の子どもたちと出会い、そこで様々なことを考えなさい」というメッセージが込められているのだろうと（勝手に）捉え返し、具体的な課題を考えました。そのなかで、バツと目にとまったものがありました。それは「幼児の和音に対する評定」に関する研究で、「これなら何人かの子どもに和音を聞かせて、その印象を聞けばいいだろう」という安直な（もつといえば杜撰な）研究デザインを企画しました。そして、そのフィールドとして、自分が通っていたあの「幼稚園」に協力をお願いしようと思ったのです。

小学校を卒業してから約一〇年近く縁がなかったので、協力依頼のためにかけた電話機の前ではとても緊張しましたが、自分も園児の時にお世話になった園長先生の声を聞いた瞬間、ホッと安らいだ感じがしました。そして、後日改めて「幼稚園」に足を運び、具体的な手続きと日程に関する打ち合わせをしました。

そのとき、卒園後に改築された園舎の雰囲気はもとより、自分が通っていたときと比べて（三年保育になったにもかかわらず）園児数が半数以下になっていた「幼稚園」の様子を見て「ずいぶん、変わってしまったな……」と感じました。しかし、その一方で屈託のない笑顔で遊ぶ子どもたちの様子を見ると、自分たちの頃と変わらないものもあるな……と感じました。

そして、このことがきっかけで、この研究テーマを修正しながら三年次のゼミ論文・四年次の卒業論文を作成し、それと併せて、頻繁にこの「幼稚園」へ足を運ぶようになりました。ある機器を用いて子どもに和音を聞かせ、その評定を聞く……という研究の手続きそのものは短

時間で済むはずなのですが、私はお弁当を持参し、子どもたちとたくさんかわらせてもらいました。この時点での私は保育学を専攻しているわけではなく、保育者養成の専門課程も何ら受けていなかったもので、いま振り返るとただ一人の「お兄ちゃん」として「遊ばせてもらっていた」のが実際のところですね。けれども、そのことをきっかけとしてこの頃から、保育に対する関心が強くなっていき、大学四年生の頃には本格的に保育の勉強をしたいと志すようになりました。そして、保育系の大学院へ進学し、専門的な勉強を積み重ねながら、修士論文の作成にあたったのですが、ここでもこの「幼稚園」で行われている就園前の子どもとその保護者を対象とする子育て支援活動にボランティアとして参加し、そこでの経験をまとめていきました。

このように、この「幼稚園」は幼少期の私を育ててくれただけでなく、「いま」の私に直接的に結びくるのです。そこでは、幼少期に送らせてもらった生活と同じように、様々な体験にもとづく思いや気づきが後の「学び」へとつながる形で、「私」を支えて続けてくれたのです。

残念ながら「幼稚園」の方は、運営する企業の事情などから、数年前に閉園となりました。多くの職員、卒園児が集まった閉園行事では、複雑な思いに駆られましたが、この「幼稚園」に対する感謝の気持ちは変わりません。また、自分の仕事もすっかり忙しくなり、また、私自身も社宅を出ていまの居住地へと移ったことから、現在も続いている前記の子育て支援を含めて、物理的にはだいぶ縁遠い関係にはなっていました。この「幼稚園」とそこでの様々な思い出は、「いま」の私を支えてくれるものとしてしっかりと生きています。

（東京家政大学）

流されずに生きる

津 守 眞

戦争という大波からの解放

昨年は日本の戦後六十年にあたり、テレビ、ラジオ、新聞など、いろいろの形で歴史が語られた。原爆や空襲、玉砕、沖繩など戦場を直接に体験した人や、その遺族たちの話は悲痛で、六十年経っても、昨日のことのように戦争を思い起こさせられた。そのわりにはどこまで本当に歴史が反省されているのか、疑わし

くなることもあった。

六十年というのは、それに幼少期を加えてほぼ人間の一生の年月であり、長寿の時代になってとくに、一生の間に歴史の転換を経験するチャンスも増えたと言えよう。

私は、日本陸軍最後の二等兵である。戦争に敗れたとき、二等兵は捕虜としてアメリカに連れて行かれ重労働をさせられると、古参の下士官たちに言われ、私

共は心配した。実際に起ったことはそうではなかった。私は無事に家に帰り、家族と再会し、大学に戻った。もう二度と兵隊に行かなくてもいいとわかったとき、私は心から自由を感じた。

六十年を経て、情報化の時代、歴史認識についても、さまざまな見解が飛び交う。

現在の私共にはつきりしていることは、日本は第二次世界大戦に敗れ、無条件降伏をし、軍備をもたない国として国際社会に復帰できたことである。異論もある。どこまで国際社会がその考えを維持できるのかについて、世界には違った考えがある。しかし、理想としてあれ、それが現実となり、日本がその最先端を担う役割を歴史の中で与えられたこと、永久に戦争放棄を宣言した国に生きているのはなんと恵まれたことか。

幼児の保育と教育の世界に身を置く者は、その中にあつてどう考え、どのように進めばよいのか。

子どもが毎日を幸せに生きられるように、子どもの

心の願いに応え、心身を労してゆけばよい。戦争の時代もそうである。これもはつきりしている。

昭和二十年十月、戦争が終わって直後に、早くも再刊された倉橋惣三『育ての心』の序文は、「国敗れて、いちばん気の毒なのは子どもである。がまた、いちばん希望をもたせるのも子どもである。済まんねといった心苦しさと、たのみますよといった頼もしさと、——」から始まる。戦後六十年の出発点である。そのとき幼児だった子どもたちがいま六十歳を超えた。あの人の、この人を思うとき「済まんね」と言われ、「たのみますよ」と言われたことに立派に応えた人たちが今の日本をつくっている。

あのときすでに大人で、軍隊の上の方で威張っていた人たちもいる。逆に、職も名誉も失って、歴史を深刻に反省した無名の人たちも数多くいた。そういう人たちが入り交じって戦後の六十年がつくられてきた。

六十年経って世界の環境は変わった。権力に遠慮



し、恐れる傾向はいつの時代にもあったし、現代もまたそうである。常に変化する情報化の世界にあって、人間の落ち着いた日常生活を保つことが真実を洞察する知恵を育むのではないか。子どもの存在と保育の営みがそれを助ける。

奔流のような

アメリカの力の蔭で

現代の世界に生きる人は、どこかでアメリカと向き合う。明治維新、第二次世界大戦と、日本人には、外でも内でも、アメリカは大きな存在であり続けた。そのテーマは、私には無謀なように思える。しかし、戦後六十年の早い時期にアメリカに留学し、幼児教育を専攻した私は、いままた考えざるを得ない。

戦後直後に私が学んだのは、コメニウス、ペスタロッチ、フレーベルの人間教育の系譜で、幼児教育はその線上にあった。倉橋惣三の幼児教育の考えもその

系譜の上にある。フレーベルの後、アメリカの幼児教育はフレーベルをどう引き継ぎ、どう改革したのかを、わたしは山下俊郎先生に尋ねた。当時愛育研究所の教養部長だった山下先生は直ちに書棚からヴァンデウオーカーの『アメリカの教育における幼稚園』を取り出して、この本を知っているかねと私に尋ねられた。それは一九〇八年の出版だが、その後の歴史を記したものはなかった。その空白を埋めることがその後の私の研究課題のひとつとなった。

間もなくアメリカに留学した私は、アメリカの進歩主義教育の実際に触れて、お茶の水女子大学附属幼稚園の遊びの保育に共通することを肌で知った。一九四八年（昭和二三）に文部省で刊行した保育要領も共通な考え方だった。私が幼稚園の歴史を英文で書いたのは一九五三年である。論文主査であったDr. フラーは、アメリカの学生が関心をもたない幼稚園の歴史にどうして私が興味をもつに至ったのか、感心して尋ねられたことは忘れがたい。彼女はそれから間もなく自動車

事故で亡くなった。

一九五三年のある日、ミネアポリスにあった幼稚園教員養成学校のミス・ウツズスクールで長年教えておられたアボット姉妹にサンデーデイナーに招かれた。

一九一〇年頃からのアメリカの進歩主義教育を身をもって生きてきた人である。多弁で、アメリカの幼児教育の生き証人だったのに、私は自分の論文を書くのに忙しくしていて、沢山質問があつたのにといまだに心を残している。人はいつの時代にも本性、自己中心である。そのために多くの貴重な機会を逃している。帰りがけに書棚から何でも好きな書物をあげると言われて、スーザン・ブロウ訳、フレール著『母の遊戯と愛撫の歌』を頂いて帰った。私の書棚にいまも大事にしている。アボット姉妹と小さな食卓を囲む落ち着いた歓談の中で、アメリカの進歩主義教育はフレールを否定したのではなく、フレールの精神に戻ろうとしたのであることを確信した。一九世紀末から二〇世紀初頭の、エリザベス・ピーボディからはじまるア

メリカの幼稚園運動の時代から考えると、アメリカ社会は幾度か変貌した。彼女の幼稚園運動の動機には、一八六〇年の南北戦争の奴隷解放運動があつた。アメリカの幼児教育には、人間をひとしく人間として尊重する精神が流れている。コンコード学派の哲学に傾倒したエリザベス・ピーボディは、フレールの幼稚園をアメリカ各地に普及させるのに奔走した。私の著書、『幼稚園の歴史』に、アメリカの幼稚園運動に尽くし、一九世紀を生き抜いたピーボディの章の最後に次のように記した。「一八九四年の正月のある日、彼女は外出先から帰ると急に疲れを覚えて床に横たわった。外には電車の通る音が聞えていた。恐らく、エリザベスの親しくしていた人たちは電車の音を聞かずに先立つたであろう」と。現代ではアメリカの自由のための戦いは、世界に広がる戦争のもとと見なされることも多いが、アメリカが高く掲げた自由は、アメリカの青年だけでなく、明治の日本の青年の夢となった。

一九六〇年代、アメリカとソ連の科学競争の時代に

なり、アメリカの幼児教育は急激に変化した。私の留学は二年足らずの短い期間だったが、その間に養われた印象は強く残り、アメリカ社会が変化しても私の認識は進歩主義教育の時代そのままに保存されていた。

次々にアメリカに留学された若い人たちから聞いて、行動主義の考えに傾斜していった様子を知り、私が物知り顔にアメリカの幼児教育を語っていたことを恥ずかしく思ったこともある。

流れ寄るものにやさしく

アボット姉妹を訪問した頃、私はミネアポリスのD氏夫妻の家庭に泊まって大学に通っていた。D氏はデパートの家具売り場に勤めておられた。第二次世界大戦直後のアメリカは世界の恒久平和をどのようにしてつくれるかに強い関心を抱いていた。D氏夫妻は、世界には軍隊でなく、警察力があればよいと主張した「世界連邦」の組織に加盟していた。戦後の日本の軍隊の解体と農地改革を高く評価しておられた。軍隊と

いう巨大な組織の維持に必要とする費用は膨大で、それをもっと他のことに使ったら世界はどんなに幸せになるか、日本は良い例だといつも言っていた。D氏夫人は、華やかな女性で、ソプラノ歌手として若い人たちの間で知られていた。

世界連邦運動の指導的位置にあったノーマン・カズンズが広島を訪れたのは一九四六年だった。著書『だれが人間の代弁者になるか』の「ヒロシマ」の章は次の文章からはじまっている。「私は『諦め』を予期していたが、すでに『再建』が始まっていた。『荒廃』を予期していたのにすでに『若い息吹』があった。私はヒロシマで原爆の破局を生き残り、命を取り戻した人たち、更に重要なことは、人間と自分自身への信頼を取り戻した人たちに出会った。ヒロシマ市民たちは世界で最も美しい市をつくることを計画していた。」「ほとんど信じがたいことだが、原爆を受けた人たちが、一、二の例外を除いて憎しみや恨みの感情をもっていないかった。」「個人的友情はいかなる政治国際情勢

をも超えて、また人種をも超えて人々の心に温かい有心を通わせる。」

D氏夫妻に連れられて、私は、ミネソタ州南部のグスタフス・アドルフス大学で行われたノーマン・カズンズの講演会に行った。私はいまも、署名入りの本『だれが人間の代弁者になるか』を大切にしている。

彼はその後何冊も著述をして、九十歳を超えて二〇世紀の最後まで生きた。

私はこれまで四度アメリカに行ったが、その度に、D氏夫妻は、私のレセプションに真っ先に駆け付けて下さった。一九八三年には日本に旅行し、二か月間滞在されて語り合うことも多かった。そのときに土産に頂いたのが、D氏夫人自身の著書、『性犯罪者たち』(The Sex Offender 1978)で驚いた。その本の序文に次のように書かれている。

「人々はしばしばあなたのような上品な婦人が性犯罪者にどうして関心をもつのかと尋ねます。知的には私は、長年、社会的に不利益を蒙った人々、犯罪行為の

ために差別を受けた人たちに関心をもってきました。

白人の中流家庭に育った私は、自分とは違う種類の人々からは庇護され守られてきました。私はこの本を書く過程で、犯罪者の個人史に耳を傾けたとき、彼等と私の違いは偶然の育ちの違いであることを確信しました。性犯罪者は人々から見下され、社会から隔離され、この地上から消えてしまった方がましだと世間から考えられています。彼等は心の深くに悩みを抱えているのです。この問題を考えるのに加害者と被害者の両側を考えないと非現実的です。性差別と暴力とはわれわれの社会に浸透しています。女性に対して支配的であることが男らしいと考えられてきたのが私共の社会の歴史です。」「刑罰をではなく、治療を」というのがこの本の主題である。

これは幼児教育と無関係ではない。幼児教育が、人間と社会の広い視野を見失ったら、技術的にはそれでいいかもしれないが、だいたいなものを欠くだろう。

D氏夫人は私の養護学校をも訪問された。そのと



き、ひとりの男の子が部屋中走り回っていた。夫人は私を見て、その子について、また私のやり方について、いろいろと質問された。私の学校を訪問される外国のお客さまは、子どもについて相当の理解があるのが通常であるが、D夫人に私の保育をわかってもらうのは易しいことではなかった。長年の間に何十通も手

紙を往復しても、保育の実話の話となると、土と血がしみ込んだ歴史で、それを言葉で伝えるのがいかにむずかしいかを保育者は知っている。西洋人と日本人とは、子どもに向かう感覚が違うのではないかと思ってしまう。

たとえそうであっても、理念が人をつなぐ。そして、人と人との直接の心の交流が平和をつくる。

一九九八年に、D氏夫人が亡くなったとの知らせを受けた。その二年前に、ミネアポリスの老人ホームに

私は夫人を見舞った。ご主人を亡くされて間もないときで、夫人はこの世のすべてを失ったかのように、だけれども顔も弁別できないのだと看護の人の話だった。D氏夫妻がいかに互いに相手に傾倒しておられたかを私は目の前にした。夫人は私の顔を見て、言葉は発しなけれども、確かに微笑み、互いに抱擁して別れた。

流れの後の静けさの中で

心穏やかに、澄んだ気持ちで、ゆっくりと子どもに向かえるときは幸いである。

私は障碍をもつ子どもと付き合うことが多い。

歩かない、歩けない子どもと付き合って、私は歩行訓練を考えたことがない。無理して歩かされ、自分の足を叩いて泣く子どもを見ると可哀想になってしまふ。その子のもっと小さな喜びを、どうして、しっかりとゆっくりと叶えてあげることにはエネルギーを使わないのか。

ちやうどこの原稿を書いているときに、以前に私共の養護学校を卒業した子どもの母親から葉書を頂いた。無理してでも歩行訓練をしなければ、いまに体重が重くなって歩くことがもつと困難になるだろうと心配していた。私は、まず子どもが自分からはじめることに目を止めて、子どもが楽しく生活できるように考えた。葉書には、「今日は涼しく美術館から駅まで、ぶらぶら歌いながら歩いた」と報告されていた。

体重の重い子どもを抱いているとき、保育者は、どうしたらそのときを生き甲斐の時に転換できるか。具体的にどうするかはそれぞれに委ねられているが、その状況から早く抜け出そうとだけ考えている時にはそれがむずかしい。自分が解放されて、子どもと一緒に生活に積極的に向かえたときに、思いがけない新たな展開が生まれる。朝、親しい先生が待っていてくれるのも子どもの生き甲斐である。今日はこの人に抱かれようと思つて学校に来るのならば、その子を抱くこと

がだいじなときなのではないか。そう思うと一日が過ぎやすくなる。

ある日、かなりの時間、ひとりの子どもと過ごした後（それはときによつて孤独な時にもなるのだが）、ふとしたことからその子は私の腕から下りて大きなボールで遊びはじめた。まわりで遊ぶ子どもたちと一緒に、私共はゆつくりとその中に加わつた。素敵な一瞬だつた。音を出して楽しむ子ども、造形でたのしむ大人と、保育の場は、大人も子どももそれぞれの時を積極的に生きられる不思議なときである。いろいろなことが起こり、決して一様に流れる円滑な時ではない。ぶつかりあつたり、いろいろなことが起こる故に生き甲斐がある。二十年近く前の、私の保育の日記のひとこまである。同様のことがいまも日々続いている。

（保育研究者）

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(10)

しょうごもり
庄籠 道子

クリスマスには八代亜紀の巻

十二月にはいると、街はすっかりクリスマスムード。

幼稚園でも先生たちがクリスマスの歌をかけたたり、ツリーを出したりしている。

きょうは、クリスマスのリースを作るんやて。丸い輪になつとつて、いろいろかざりがついとつて、ドアとかにぶらさげるやつ。ハンガーをまげて、緑の画用紙を巻きつける。かざりも作る。赤や緑の色紙、金色のシール、色とりどりのリボン。いろんなものが用意された。カセットテープからはクリスマスの歌。だんだんクリス

マス気分になってきたぞ。

「サンタさんの顔、作ろかな」

「くつしたにしょーかな」

にぎやかにその気になってきた。細かい作業はあまり好きでないたつやもしかたがないから作り始めた。なるべく簡単にできるやつにしよう。

ん？　なんか聞こえてきた。なんか雰囲気が違うぞ。庭を見るとラジオのおっちゃんが立っている。ラジオからすごいボリュームで歌が流れている。聞いたことある

ぞ。八代重紀の『舟歌』だ。へー、おっちゃん、ラジオ体操の曲のときだけポリウムあげるわけじゃないんだ。おっちゃん、この歌、好きなんやな。♪……しみじみ飲めばー、しみじみとー……♪

うん、おっちゃん、いい歌だよ、これ。だけど、今、クリスマス気分なんだけどなあ……籠先生も苦笑してる。

「おっちゃん、おはよう」

ガラス越しにたつやが手を振ると、おっちゃんも

「よお！」

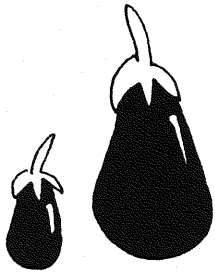
と、右手をあげた。

よいといあいあのことヨ朝寝するダンチヨネ……♪

舟歌が遠ざかっていく。

「さ、私たちはクリスマスよ」籠先生がきっぱりと言った。

田原のおばちゃんがおうち



の都合で、用務員をやめた。かわりに藤田のおばちゃんが来た。藤田のおばちゃんは、このたけのこ村で生まれて、ずっとたけのこ村で大きくなったそうだ。もう三十五年もたけのこ村に住んでるわけだ。

籠先生が藤田さんに尋ねている。

「じゃあ、藤田さんが小さい時にも、ラジオのおっちゃん、おったん？」

「いましたよ。今と同じでした」

「えっ？ 同じ？ 三十五年前から？」

「あかちゃんの時のことはわからへんけど、私がものごろついたときから、おっちゃん、あんな感じでした。

いつもラジオ持ってて、いつもラジオ体操聞いてて、小学校の運動場横切って……」

へー、籠先生がびっくりしている。

「そうか。たけのこ村のみんなが、おっちゃんは何をしてもおどろかないはずだ。年季がはいってるんだ」

すごく感心している。そんなおおげさなことかいなあ。

「おっちゃん、寒いなあ」の巻

寒い。雪でもふりそうな寒さだ。あいさつは、「寒いねえ」「冷えますねえ」だ。おっちゃん以外には。

おっちゃんは、夕方会つても、どんなに寒い日でも、

「おはよう。あちいなあー」である。僕たちも心得ているから、夕方会つても、どんなに寒い日に会つても、

「おっちゃん、おはよう。あちいなあー」と言う。

だけど、その日は、ものすごく寒かった。あまりに寒かったからだろう、籠先生が、朝おっちゃんに会った時に、

「おっちゃん、寒いなあ」

と、言った。言った後で気がついて、しまったという顔をしていた。しかし、おっちゃんは

「おお、さみいなあ」

と言った。籠先生はびっくりした。見ていたばかりたちも

びっくりした。

そこで、りようたが、おっちゃんのところに行って、いった。おっちゃんの顔を見上げて、

「おっちゃん、おはよう」

「お、おはようー」

とあいさつをかわしてから、

「おっちゃん、寒いなあ」

と、言ってみた。どきどきした。

「お？ さみいなあー」

返事が返ってきた。りようたは大急ぎで籠先生のところに行って来た。

「先生。おっちゃん、ほんとにも 寒いなあ、言うたわ。

すげー」

何がどうすごいのかはよくわからないが、おっちゃん

に「寒いなあ」とあいさつするのが、しばらく流行った。返事してくれる時もあったし、取り合ってくれない時もあった。

その翌日だっただろうか。朝来て、としなりが言った。

「先生、あのな、今日、南村でお葬式やで」

「あら、お葬式？」

「うん。あんな、ラジオのおっちゃんのおねえさんが亡くなったんやて」

「え？ おっちゃんにおねえさんがおったん？」

その日、幼稚園の前を通りかかった、こうちゃんのおばあちゃんに籠先生が聞いた。

ラジオのおっちゃんには、歩いたり、車椅子に乗ったりしないおねえさんがおったそうさ。おととい亡くなったそうさ。

そのあまり動けないおねえさんのところに毎日ごはん

を運ぶのが、おっちゃんの仕事だったのだそうさ。ごはんを作ってくれるのは、おっちゃんの弟の奥さん。そうそう、おっちゃんは、近所の家に牛乳を配達するという仕事もしているという。

おっちゃんは、遠くまで歩いていっても、おねえさんにごはんを運ぶために、必ず昼前には家に帰っていたそうさ。時間にとってもきちょうめんなのだそうさ。

「ああ、それで、おっちゃんは毎日きちんとラジオ体操の時間に幼稚園に来るんだー」またまた籠先生が感心している。

昼頃、おっちゃんが幼稚園の前に現れた。

「おっちゃん、おはよう。おっちゃん、お葬式は終わったの？」

籠先生が聞いたけど、おっちゃんは返事をしなかった。さびしそうな顔に見えたのは気のせいだろうか。

（保育研究グループ はるにれ）

かめきち探険隊

佐藤 寛子

クラスで飼っていた亀がいなくなった。

保育中、T夫とK夫が亀を砂場に連れ出し、砂まみれにして遊んでいたのだ。

「かめきちはね、お砂は嫌いなものよ」

と声をかけ、水を張ったたらいを用意した。T夫は、亀が休めるようにと、煉瓦をその中に入れ、K夫は砂まみれの亀を、そつとたらいに逃がした。二人の様子を見、亀が気持ちよさそうにたらいの中で歩き出すのを確認すると、私は安心して、それっきりそのことを

すっかり忘れてしまった。

降園時間が近づき、片付けが済んで、子どもたちが席に着き始めた頃、ふと水槽に目をやった。

—— いない…… ——

慌てる私の様子に気付いて、子どもたちが

「せんせい、どうしたの？」

と、口々に声をかけてくる。

「ごめんね。かめきちがいなくなっちゃったから、さがしてきます。みんなは、おかえりの支度をして待って

てね」

四歳児の六月。

園の生活に慣れてきた子どもたちは、それぞれに自分らしさを出し始めていた。私の話を素直に聞き、身支度を済ませ、おとなしく保育室で待っていてくれるはず……などなかった。

大急ぎで靴を履き替え園庭に出る私の後から、ぞろぞろとクラスの半数の子どもたちがついてきた。残りの半数の子どもたちは、入り口のドアや窓から身を乗り出して、その様子を見ている。

「いっしょにさがそうぜ！」

「がんばってねえ」

など、このクラス、こんなにまとまっていたかしら？

と、私は自分の目と耳を疑った。

小さな亀を探すには、園庭は広すぎた。

「かめきちどこにいるの？」

と、草をかき分け、プランターや大きな石を動かして

さがし回った。必死な私の形相に、最初はなんだか嬉しそうに飛び跳ねていた子どもたちも、本来の目的に氣付いた様子。

「かめきち」と呼びながら、一生懸命さがし始めた。

「せんせーい！ いたよー！」

T子の大きな声に、

「どこどこ？」

と、みんなで駆け寄る。

「ほらね」

T子の指さす方を見ると、なんと大きな石。

「かめきちに似てるでしょ？」

真剣なT子の表情もさることながら、

「ほんとうだ。そっくりだ。」

「かめきちじゃない？」

と、周りの子どもたちも真剣そのもの。

——うーん。似てるけど、それはやっぱり石だと思う

よ——

そんなこんなで、大騒ぎしながらさがし回ったが、

結局その日は見つからなかった。

翌日。

おはようの挨拶もそこそこに、S夫は水槽に駆け寄った。空っぽの水槽を見て、

「やつぱり、かえってこなかったか……」

と、つぶやいている。

「せんせい、かめきち、やつぱり見つからなかったんですね」

H夫の母が話しかけてきた。

四月に入り、担任が替わったことを、まだ受け入れてくれない様子があつたH夫は、私には必要最低限のことしか話さないでいた。

かめきちの話題が食卓にのぼつたのだろうか？

ちよっぴり嬉しかった。

「せんせい、きょうもさがしに行こう！」

数人の子どもたちに交ざって、H夫の姿が見えた。

張り切って園庭に出る。

「かめきち。出ておいで」

みんなで声を合わせて練り歩く。

「ちよっとまって！」

K夫は、額にうっすら汗をに

じませながら、みんなを呼び止めた。

「かめきちは、耳がないんじゃないか？」

周りの子どもたちが、ふと黙り込んだ。何やら考えている様子。いつの間にか、加わっていた隣のクラス

のH子が、

「あるよ。あるけど、ちっちゃいんじゃない？」

と、言う。すると、H夫が、

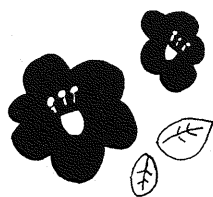
「そうだよ。人間には見えないんだ」

と、はっきり言った。K夫は、

「だったら、ちっちゃい耳でも聞こえるように、呼ばないと！」

と、提案。

「そうだそうだ！」



「みんなでいっしょに呼ぼうよ」

「せーのっ」

「か・め・き・ち」

その日のおかえりは、かめきちの話題でもちきりだった。かめきちが、自分で帰って来なくなったときのために、地図を書くことになった。クラスがわかるように、入り口に飾りを付けることも決定。

今日一日、保育室にこもって、何やら作っていたY夫は、みんなに見て欲しいといって、画用紙で作った亀を自分の引き出しから出してきた。顔と手足、しっぽを折り曲げると甲羅に隠れて見えなくなる様子を実際に演してみせた。

「すごいねえ」と声があがる。

「あしたもさがそう！」

子どもたちの降園後、私は、画用紙でかめきちバッジを作った。自分の不注意で亀を逃がしてしまったことへの、子どもたちとかめきちへのお詫びの気持ちで

ある。

翌々日から、園章の隣に、かめきちバッジをつけた子どもたちが、自主的にかめきちさがしに出発。かめきち失踪のうわさは、あつという間に幼稚園中に広がり、三歳児の保護者から、亀は赤が好きだという情報をもたらした。早速赤い紙を園庭に置いてみたりした。

子どもたちも私も、いつの間にか自分たちを「かめきち探險隊」と呼ぶようになっていた。探險隊のバッジに憧れたのか、隣のクラスで、偽造バッジ（子どもの手で、本当にかわいらしい亀が描かれている）までもが登場。

亀の足跡を見つけたと言って、地面のリヤカーのタイヤの跡を追う子どもたちもあつた。タイヤの跡が消えたところを必死にシャベルで掘っている。どうやら亀は土の中で冬眠することを図鑑で調べてきたようだ。

季節は夏。かめきちが土の中にいるはずはない。け

れど、子どもたちの真剣な様子を見ながら、私までも、まるでそこらかめきちが出てくるのではないかと、そんな気持ちになった。

かめきちが無事にクラスに戻ることをどんなに願ったことだろう。しかし残念なことに、今もまだ見つかっていない。その後も、かめきちバッジをずっと園章の隣につけて登園してくる子どもたちがあつたが、かめきちさがしは、少しずつ下火になっていった。

けれど、この一件があつて、クラスの雰囲気は大きく変わったように思う。

*

四月に初めて受け持ったとき、子どもたちはみなそれぞれに戸惑いを見せていた。

三歳児クラスで自分の先生だった人が、四月に登園してみたら、隣のクラスの先生になっていたY夫は、まるで、捨てられてしまったかのように、切ない表情

を見せていた。Y夫やT子は、今は別の幼稚園に行つてしまつてここにはいないE先生との思い出を再現するかのように、黙々と製作に励んだ。他の幼稚園から入園してきた子どもたちは、自分の居場所が見つからず、堅い表情のまま立ちすくんでいたり、私に必死にしがみついたりしながら、環境の変化を受け止めようとしていた。

慣れ親しんだ人、場所、時間との突然の別れ。子どもたちは予期しなかつた別れをそれぞれに経験してきていた。

かめきちの失踪は、当たり前そこにいると思つていたものが突然いなくなる出来事だった。いなくなつたかめきちをさがすことで、みんなの気持ちが一つになったのは、そうした「別れ」をそれぞれに経験したものの同士だったからかもしれない。そして、そんな子どもたちが生きる「四歳の今」は、経験を通して、考へたり感じたりしながら、遊びを創り出していく楽し

さを知り始める時なのかもしれない。

子どもたちは、私よりも数倍かめきちさがしを楽しんでいた。石を見ては「かめきちじゃない?」と言い、「絶対にここにいるよ」と言っては地面を掘り続けた。

「いたいた!」と言って、五歳児の保育室に行き、前から飼われていた亀を「これは、かめきちだ!」と主張し、困った五歳児が、「これは、山の組の亀だよ」と諭す場面もあった。

子どもたちは、かめきちさがしをしながら、自分たちの保育室から、他のクラス、遊戯室、園庭、園庭の奥の高台……と、どんどん生活の空間を拡げていった。そして、それと同時に、担任との関係から一歩を踏み出し、クラスの友だちと思いを共有する楽しさをあじわいながら、行く先々で三歳児、五歳児、他のクラスの教師と出会い、関りを拡げていった。

子どもたちの姿を見ながら、実感したことがある。

「別れ」はおしまいでではなく、次の出会いへとつな

がっているのだということ。

新しい出会いは、生きる上での大きなエネルギーになること。

こうしたことは、子どもたちは全部承知のことかもしれない。子どもたちは、大人よりも、自分の予期せぬところで環境が変わる経験を生活の中でたくさんしている。そして、それを柔軟に受け止める術をちゃんとからだにもっている。

あとは、かめきちの幸せを祈るだけだ。

〔大学構内の〕図書館前の池に亀がいるじゃない? あの中にかめきちもいるわよ!」

かめきちを案じる私に、ある先生が声をかけてくれた。職員室での会話がどうぞ現実になりますように……。

子どもたちを誘って、散歩がてら見に行ってみようか……。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編集後記

読者の皆様、新年おめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。今年の十二支にちなんで「いぬ」を特集しました。子どもが犬や猫をペットにしたくても、飼わない家庭が増えていきます。住宅事情、共働きの増加（家が留守になる）、アトピーなどが主な原因なのでしょうが、動物と共生する際にならず付随するもろもろの面倒やわずらわしさに対して、現代人の耐性が低くなっているような気がします。本田先生のいわれる、今の日本の「子ども忌避」の心性につながるのかもしれない。

今年は千支でひのえいぬ（丙戌）

という年に当たります。千支は六十年で還暦、一巡りですから、六十年前の同じ千支の年は昭和二十一年、敗戦後の日本がはじめて迎えた新年でした。焦土と化した地面を踏みしめて、一人ひとりの日本人がそれぞれ大きな希望を託したお正月だったのではないのでしょうか。ちなみに、その前の丙戌は明治十九年、「小学校令」が公布され、「幼稚園」がはじめて国によって規定された年でした。この丙戌の区切りになりまして、私も編集者も初心に帰り、本誌を一から見直す機会にできればと念じております。表紙挿絵も一新、佐野真紀子さんをお願いしました。本誌への皆様のご意見、保育に関する自由投稿などもお待ちしております。電子メール yujinai@yahoo.co.jp までどうぞ。

（浜口）

幼児の教育

第一〇五巻 第一号

（二〇〇六年一月号）

定価五五〇円（本体五二四円）

発行 平成十八年一月一日

編集兼発行人 浜口順子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五-1-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六-14-19

〒03-3539-5166-13（営業）

〒03-3539-5166-04（編集）

振替 〇〇一九〇-1-19640〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

好

評

発

売

中!

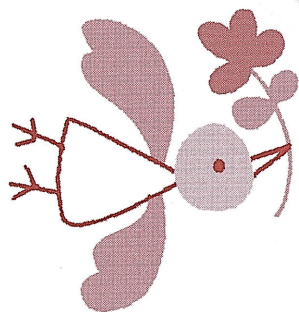
子どもの心が

かがやくとき

これからの幼児の育ちを考える

漆原智良 著

戦災孤児として戦後を迎えた著者が、自らの体験をもとに、「子への愛情とは何か」をわかりやすく説いています。子どもへの愛情の示し方から、悩む保育者への優しさあふれるアドバイス・絵本の読み聞かせまでを感動的に織りなし、保育・教育・育児にかかわるすべての方々へ贈ります。



21×15cm／256頁
定価1,365円（税込）

●目次から

- 第1章 ハマユウの花のように
—わが半生から学んだ幼児教育
- 第2章 幼児との温かい心のふれあい
—保育者のひとことが子どもを伸ばす
- 第3章 『読み聞かせ』を楽しむために
- 第4章 保育の悩み相談 Q&A
- 第5章 スピーチの基本ABC
- 第6章 月別『書き出し』文例集

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

最新刊

岩田純一 著

子どものことばと時間と空間と

子どもはどのようにして 《じぶん》を発見するのか

子どもは、こんなにもいきいきと
「あした」を思い描いて、
自己を育てていく...



19×13cm 232頁
定価1,680円(税込)

子どもたちは、「きのう」より「きょう」を懸命に生き、これからやってくる「あした」を思い、未来に向かって生活しています。では、子どもは生まれて成長していくなかで、「きのう」の《じぶん》は「きょう」の《じぶん》と同じであり、「あした」も同じ《じぶん》が続いていくという認識を、いつ、どのようにして獲得していくのでしょうか。豊富な保育のエピソードをとりあげて、子どもたちの育つみちすじを考えていきます。

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。